様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３６００７６

研究課題名（和文）熊本県南小国町黒川温泉における訪問客と受入側の意識のギャップについて

研究課題名（英文）The Gap of Awareness between Visitors and Hosts at Kurokawa Onsen Hot Spring Resort, Minami-Oguni, Kumamoto, Japan

研究代表者
能津　和雄（Nozu, Kazuo）

東海大学・熊本教養教育センター・准教授

研究者番号：９０７１０８５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：1980年代に急速に全国的な知名度を上げ、熊本県を代表する観光地として成長した黒川温泉では、訪問客と受入側の意識のギャップが観光振興の上で問題になっていた。その要因を調査・研究した結果、訪問客は黒川温泉そのものを主な目的にするよりも、九州で一般的な周遊観光地の一つとして認識されているだけに過ぎないことが判明した。このため、今後の観光振興は県境を超えた広域連携が必要であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Kurokawa Onsen is located in Kumamoto Prefecture, recognised as leading hot spring resort in Japan. This resort has been developed rapidly as famous tourist destination, however there is perception gap between visitors and hosts. As a result of this research, tourists recognise Kurokawa Onsen as 'One of destinations on circular tour', rather than single destination. In order to develop the tourist destination, we need to consider the cooperation with other tourist destinations across the border of prefectures.

研究分野：観光経営学

キーワード：黒川温泉　意識のギャップ　観光情報　周遊型観光　熊本県　公共交通　九州横断道路　熊本地震

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者がかつて勤務していた熊本県阿蘇郡南小国町に所在する黒川温泉観光旅館協同組合において、訪問客と受入側の意識の違いによるトラブルを実際に経験したことが研究のきっかけになっている。

かつては各旅館の露天風呂を宿泊者以外にも開放する「露天風呂めぐり」などで一世を風靡した黒川温泉も、2002（平成 14）年をピークに宿泊客数は年々減少の一途をたどっており、このままでは地域経済に深刻な影響を与えかねない状況に陥っている。その中で、黒川温泉のみならずバス会社などの交通機関や周辺の観光地も含めてさまざまな施策を行っているが、決め手に欠けているのが現状である。その中には九州外からの需要を正確に読めずに「地元の常識」で改善策を打ち出したために、効果を得られずに失敗に終わった事例も見られる。

また近年ではブームの原点である「露天風呂」の存在や意味を知らず、単に「有名な温泉地」という感覚で来訪する訪問客が多くなっている。こういった来訪客は黒川温泉の本来の魅力を理解しない状態で現地滞在をすることから、必ずしも期待通りの訪問にならず不満を感じる人も少なくない。さらに宿泊せずに温泉入浴だけを楽しむ「立ち寄り湯」がブームとなり、ドライブ途中の「休憩」と「身体を洗うこと」に主体をおいた温泉の利用形態が、黒川温泉における「露天風呂めぐり」の趣旨と合致しないことによるトラブルも後を絶たない。

このように黒川温泉においては訪問者と受入側の意識が乖離しており、このことが観光による地域振興に多大な影響を与えている状況にあったことが背景にある。

２．研究の目的

熊本県阿蘇郡南小国町に所在する黒川温泉は、1980 年代後半に始まった「露天風呂めぐり」で全国的に有名になり、2002（平成 14）年には宿泊者数がピークを迎えた。しかし、その後にブームとなった「立ち寄り湯」の習慣に黒川温泉の各旅館が対応しなかったことに加え、マスコミや旅行会社など外部の企業によってイメージが作られてしまったため、かつての「地域主体」の観光振興が十分にできなくなり、宿泊者数は年々減少の一途をたどっている。本研究では、訪問者と受入側の意識のギャップを浮き彫りにした上で、どの部分で訪問者の「需要」に応えていくべきなのかについて検討する。そしてどのようにして受入側である黒川温泉の「魅力」と「個性」を保ち続けて地域経済を安定化させるべきなのか、需要側である現地での訪問者へのアンケートと、供給側である受入側への聞き取りを中心に明らかにするとともに、地域における持続可能な観光「サステイナブル・ツーリズム」についての研究手法を確立することを目的とする。

３．研究の方法

はじめに先行研究のレビューを行ったが、黒川温泉に関して全体を俯瞰した研究は残念ながら見当たらなかった。さらに発表された論文やレポート等においても、その多くは単なる「成功した観光地」として、有名になった 1980 年代後半からの状況をまとめたレポートに過ぎず、詳細な検討がなされた研究成果は想像以上に少なかった。その中で人文地理学からの観点で調査結果を発表した山村順次や個別の旅館の経営状況を詳細に明らかにした浦達雄などの研究成果はあったものの、歴史的な観点からの先行研究が見られなかったことから、本研究では江戸時代にまでさかのぼって本格的な文献調査を行うことを最初の課題とした。

その後、黒川温泉における宿泊者数等の統計データを収集したうえで、周辺観光地や都道府県との比較を行い、観光客の動きやシーズナリティなどを明らかにしたうえで、その前提の下で黒川温泉現地においてアンケート調査を行う予定であった。

しかし文献調査が予想以上手間取ってしまったことから研究は遅れがちとなった。その後データ収集と分析を進めてきたが、概ね終了した段階で熊本地震が発生し、黒川温泉における宿泊者数も激減する状況となった。このためアンケート調査は断念せざるを得なくなり、当初予定していなかった黒川温泉への交通アクセスについての詳細な調査と地震による影響との関係についての分析にシフトした。もっともこの作戦変更は、結果的に当初からのテーマである「来訪者と受入側の意識のギャップ」を明らかにするために有効な方法であったことが判明し、研究上有益な成果をもたらすこととなった。

４．研究成果

(1)先行研究のレビュー

先行研究に関しては、黒川温泉を「急速に人気が出た温泉地」の成功事例としてとらえるものが大きく見受けられた。しかしその多くは、黒川温泉を視察して旅館組合関係者から聞き取りしたうえで、旅館組合が用意する視察資料を基に、その成功の軌跡のみをたどるものが一般的であった。その背景には、人気温泉地としてマスコミに多く取り上げられたことがきっかけで調査したケースが多かったことが挙げられる。加えて黒川温泉の優位性を主張した商業出版による書籍が、この分野における学会発表などを全く行わない大学教員によってなされたことも大きな一因となっている。この出版物は多くの論文で参考文献として取り上げられているものの、その内容を吟味することなく「鵜呑み」にして引用したに過ぎない研究成果が多く見られた。

このような状況を批判する学術書もわずかながら見られたが、商業出版された書籍に全く頼らずに研究して論文や学術書で発表

した研究者も見られた。しかし、これらの研究成果も、黒川温泉の歴史に関しては地元新聞社が出版した書籍に頼らざるを得ない状況にあったため、本研究では一次資料の調査を最初からやり直すことで、歴史の流れを明らかにすることから始めることとした。

(2)文献調査

文献調査は黒川温泉が所在する熊本県内での資料収集を企図して、熊本県立図書館や熊本市立図書館を中心に調査することを当初予定していた。ところが両図書館とも耐震補強のための工事期間で長期休館となったため、資料収集は困難を極めた。熊本県の場合、人口・経済・政治・文化等すべてが熊本市に一極集中しているため、他の市町村で収蔵している資料が限られていたことから、県外の収蔵資料にもあたることとした。

その中で、早稲田大学がインターネット上において公開している早稲田大学古典籍総合データベースにおいて、黒川温泉についての記載がある「肥後国誌巻之二十　肥後国並豊州直入郡久住志略」を発見し、調査を行った。その結果、熊本日日新聞情報センターが 2000 年に出版し、多くの研究者が引用してきた書籍『黒川温泉「急成長」を読む』において、黒川温泉が「熱湯井腐湯」と記載していたものが誤植であることを発見し、正しい表記が「熱湯并腐湯」（并は併の旧字）であることを突き止めた。これに関しては、他の写本などとも照合して間違いないことが判明している。

さらに明治時代については、愛知県西尾市の岩瀬文庫で「日本鉱泉誌」での記載を確認した他、大正時代の状況については熊本県小国町の書店で偶然見つけた「熊本県阿蘇郡小国郷土誌」での記述を見つけることができた。その後については愛知県図書館や東海大学付属図書館などでも調査を行い、1980 年代前半までの歴史をたどることができた。その結果判明したのは、長い間高温の温泉が自噴していたこと、九州内からの滞在客が湯治場として利用していたものの知名度はそれほど高くなかったこと、そして 1964 年の九州横断道路（別府阿蘇道路＝やまなみハイウェイ）開通に伴う旅館の増加と泉源の開発によって自噴する温泉がなくなってしまったことである。そして九州横断道路の存在が、後に黒川温泉が有名になった際に九州外からの観光客が流れ込む一つの要因だったことも確認できた。このことは、その後の研究の進展に大きな影響を与えることとなった。

(3)観光客の流動に関する調査と考察

当初はアンケート調査を行うための前提として、宿泊客の流動についての基礎的なデータを確保することを目指し、その収集について検討を行った。その過程で研究代表者は本研究を行う以前から、インターネット上で黒川温泉に関して、来訪者に役立つ情報提供していたことから、これを利用できないか検討した。このネット上での情報提供は、黒川温泉観光旅館協同組合の事務局長在職中に、当時の組合長に口頭で許可を取ったうえで、株式会社アクセルホールディングが運営する道場制投稿系ウェブサイト「まにあ道」において「黒川温泉道場」の名称で開設したものである。本道場は旅館組合窓口や電話での問い合わせが多かった事項について、「ネタ」と呼ばれるトピックを立てることで詳細な説明を行ったものである。このトピックはアクセス数をカウントすることができるため、定期的に計測も行った。その途中経過で、宮崎県高千穂町との周遊を希望する観光客が多いことと、大分県から黒川温泉へ流入する需要が多いことを突き止めた。

次の段階として他地域との周遊についての需要を裏付けるために、宿泊客の季節変動についての基礎的な数値を、二次データの活用により分析することとした。その際に利用したのが、黒川温泉観光旅館協同組合や地元自治体が収集している月別の宿泊客数の統計である。このデータを各月の人数を年間合計人数で除することで割合をパーセンテージに示したうえで、黒川温泉と熊本県・大分県・大分県由布市（由布院温泉を含む）・宮崎県高千穂町とを個別に比較・検討を６年分にわたって行った。

その結果、黒川温泉の月別の宿泊者数の動きは熊本県全体とはかなり異なることと、大分県由布市の動きとはほぼ一致するという興味深い結果が出た。さらに 2007 年の段階では動きに関連性が希薄だった宮崎県高千穂町が、2010 年頃からグラフの動きに関連性が見られるようになるという変化も見られた。このことにより、もともと九州横断道路で結ばれていた大分県由布院方面からの周遊はかなり以前から顕著だったことに対し、その沿線から外れている高千穂に関しては、2010 年頃から新たなルートが構築されてきたことも判明した。その理由として、2005 年に高千穂町は水害に襲われたことで高千穂鉄道が運休を余儀なくされ、結局復活できずに 2008 年に正式に廃止されてしまったことによる地元の危機感から、高千穂町役場が大手航空会社から派遣された地域再生マネージャーを採用して、観光地としての売り込みを首都圏方面にかけたことが理由として考えられる。しかしこのことに関しては裏付けがとれていないことから、あくまでも推測の域を出ない状況であり、今後の研究課題として調べる必要がある。

また、九州横断道路の歴史と通行台数の推移、このルートを利用した公共交通機関である九州横断バスに関する運行ダイヤの変遷と九州へ入域する観光客の流れを把握することで、黒川温泉を取り巻く交通環境の変化についても調査を行い、インフラ面からの研究にも取り組み、その影響も明らかにした。

(4)熊本地震の発生とそれに伴う影響

ここまでの研究をもとに、実際に黒川温泉を訪問する観光客を対象としたアンケートの実施を考えていたが、2016 年４月 14 日に熊本地震の前震が発生、16 日には本震が発生した上に余震が数千回も発生するという大災害に見舞われた。この地震では黒川温泉でも被害に遭った旅館が全壊１軒を含め数軒出たほか、熊本市内と黒川温泉を結ぶメインの交通路が途絶するなど、深刻な影響をもたらした。さらに研究代表者自身も被災して避難を余儀なくされたほか、研究室が所在する大学も被災して研究に多大な支障が出た。このため、黒川温泉へ向かう観光客は激減し、収入を断たれた旅館は従業員の解雇や派遣労働者の雇い止めに踏み切らざるを得ない状況に追い込まれた。５月 15 日まで所属する大学のキャンパスがすべて休講となり、研究・教育を遂行することができなかったため、アンケート調査については断念するとともに、当面の課題として黒川温泉を中心に熊本県全体の観光地の被災状況の調査を行い、それをできるだけ早い機会に社会に発表することで、黒川温泉の復興に資することを目指すこととした。

まず手始めに、一般市民向けの講座として、第 28 回愛知サマーセミナーにおいて「緊急報告・そこが知りたい熊本地震」（愛知県名古屋市天白区・東海学園大学）と「熊本と大分を観光で応援しよう！」（同・東海学園高等学校）を開講して、啓蒙に努めた。その後、大阪市における地理教育研究会、仙台市における日本地理学会では実際に黒川温泉においてどのような影響が起きたかを中心に発表を行い、札幌市における日韓中地理学会議（Japan-Korea-China Joint Conference on Geography）では英語で発表することで国際的にも状況を伝える成果をあげた。

これらの発表の基本は、黒川温泉への交通手段についてすべてのルートを提示したうえで、その利用の可否について明らかにしたものである。その実態は、本州方面からの観光客のメインルートである大分県由布院方面からのアクセスには全く支障がなく、福岡市方面からのアクセスである大分県日田市方面からのルートも震災から半年足らずで復旧を果たし、複数のルートが確保できていた。しかし、熊本市内から黒川温泉に向かうメインルートである国道 57 号線が大規模な土砂崩落の影響で壊滅的な打撃を受け、カーブが多い山道の代替路に交通集中することで渋滞が頻発した。この状況が周遊型観光の需要に悪影響を与えたことにより、観光客の大幅な減少につながった。

ここで判明したのは、九州における域外からの観光客は「周遊型観光」ができるかどうかが、観光行動のモチベーションにつながっていることである。これは周遊経路の一部が支障を受けただけで、九州への旅行そのものを取りやめてしまうという現実を意味する。

(5)九州における周遊型観光の重要性

熊本地震に伴う観光客減への対策として需要喚起を図ることを目的に 2016 年６月、国の補助金で「ふっこう割」と呼ばれる、１枚 5,000 円相当の宿泊券を 1,500 円で販売するキャンペーンが開始された。その効果により一定数の宿泊客が黒川温泉にも滞在するという結果を出した。しかし旅館への聞き取り調査の回答は意外なもので、「ふっこう割」を利用したのは大半が九州内からの観光客で、域外からの観光客はほとんどいなかったとのことであった。つまり九州外から来る観光客は、たとえ金銭的なインセンティブがあったとしても、周遊型観光が成立しない限り来てくれないということが証明された。このことは、今後の復興のあり方に一石を投じるとともに、「周遊型観光」を堅持しなければ九州外からの観光客を呼ぶことはできず、観光による域外収入を得るための必須条件であることが、この震災で明らかとなった。

(6)総括・結論

本研究では、黒川温泉についての歴史から現在までの発展の軌跡と、宿泊客数やウェブサイトアクセス数のカウントなどの統計データと聞き取り調査などから、観光客の意識について明らかにしてきた。ここで注目すべきなのは、本研究が黒川温泉をテーマにしてきたにもかかわらず、結論は九州全体の観光振興をするためには周遊型観光が必要である、というものである。確かに黒川温泉は露天風呂めぐりが人気を呼んだことで全国的な知名度を持つ観光地に成長したことは、過去の研究によって明らかにされていることである。しかし観光客の動きを見ると、黒川温泉が置かれた観光地として位置づけは、単にその温泉地を満喫しようとする「目的地」というよりはむしろ、九州を周遊する上での「途中訪問地」のひとつにすぎない、ということなのである。

このことは、黒川温泉の地域振興を行うにあたって、その地域の魅力を高めるための努力だけでなく、周辺の観光地と共同歩調をとった誘客策をとる必要性があることを証明している。さらに、観光地の連合体が都道府県別に分かれてしまっている現状が、由布院や高千穂といった他県の観光地と組み合わせられることが多い黒川温泉の発展を阻害している可能性を生んでいることさえ指摘できるのである。このことは、域外から来る観光客は単に「九州旅行」をしているのであって、熊本県へ行くとか、黒川温泉に行くといった意識を持っていないことを示している。周遊型観光を指向する訪問客と、自らの観光地の発展を考える受入側にギャップが生まれるのは、観光に関する意識が根本から違うからに他ならない。今こそ個別の観光地や各県の境界を超えて、九州全体で観光振興に取り組む必要性があることをここに宣言して本研究の結論としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① 能津　和雄、熊本地震による観光への影響、地理、査読無、Vol.61、No.10、2016、pp. 28-35

〔学会発表〕（計１２件）

① 能津　和雄、黒川温泉と熊本県及び大分県における宿泊者数の相関関係について、2014 年度東北地理学会秋季学術大会（山形県山形市・山形大学）、2014
② 能津　和雄、九州における広域観光と温泉との関係について、日本温泉地域学会第 25 回研究発表大会（長崎県雲仙市・雲仙温泉）、2015
③ NOZU Kazuo, *The Gap of Awareness between Visitors and Hosts at Kurokawa Onsen Hot Spring Resort, Minami-Oguni, Kumamoto, Japan*, The 2015 IGU (International Geographical Union) Regional Conference 'IGU MOSCOW 2015' (Moscow, RUSSIA), 2015
④ 能津　和雄、九州横断バスの変遷と広域観光に与えた影響、2015 年度東北地理学会秋季学術大会（新潟県上越市・上越教育大学）、2015
⑤ 能津　和雄、緊急報告・熊本地震が地域に与えた影響について、地理教育研究会第５５回大阪・金蘭会大会（大阪府大阪市北区・金蘭会高等学校・中学校）、2016
⑥ NOZU Kazuo, *The Impact of the 2016 Kumamoto Earthquake and the Behaviour of Local Residents and Tourists*, The 11th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography (Sapporo, JAPAN), 2016
⑦ 能津　和雄、熊本地震に伴う熊本県南小国町黒川温泉への影響について、日本地理学会 2016 年秋季学術大会（宮城県仙台市青葉区・東北大学）、2016
⑧ 能津　和雄、熊本地震に伴う阿蘇地方への道路網及び公共交通における影響について、日本地理学会 2017 年春季学術大会（茨城県つくば市・筑波大学）、2017
⑨ NOZU Kazuo, *The Influence of the 2016 Kumamoto Earthquake on Tourist Behaviour at Kurokawa Onsen Hot Spring Resort in Japan*, The Visitor Economy - Strategies and Innovations (Bournemouth University, Poole, UNITED KINGDOM), 2017
⑩ 能津　和雄、周遊型観光における九州横断道路の役割について、熊本地理学会 2017 年度研究発表会（熊本県熊本市中央区・熊本大学）、2018
⑪ 能津　和雄、熊本県南小国町黒川温泉に関するウェブサイト掲載情報の関心の推移について、日本地理学会 2018 年春季学術大会（東京都小金井市・東京学芸大学）、2018
⑫ 能津　和雄、黒川温泉の過去・現在・未来を考える、日本温泉地域学会第 31 回研究発表大会（熊本県阿蘇郡南小国町・南小国町役場／黒川温泉）、2018

〔図書〕（計１件）

① 能津　和雄、成文堂、阿蘇郡南小国町黒川温泉における地域振興　所収：山中進・鈴木康夫編『熊本の地域研究』、2016、15

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
アウトリーチ活動（一般市民向け講座）

① 能津　和雄、「緊急報告・そこが知りたい熊本地震」、2016 愛知サマーセミナー（愛知県名古屋市天白区・東海学園大学）、2016
② 能津　和雄、「熊本と大分を観光で応援しよう！」、2016 愛知サマーセミナー（愛知県名古屋市天白区・東海学園高等学校）、2016
③ 能津　和雄、「熊本観光を楽しむ方法教えます！」、2017 愛知サマーセミナー（愛知県名古屋市中村区・同朋大学）、2017

６．研究組織

(1)研究代表者
能津　和雄（NOZU, Kazuo）
東海大学・熊本教養教育センター・准教授
研究者番号：９０７１０８５６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
浦　達雄（URA, Tatsuo）
九州産業大学・商学部・教授
研究者番号：４０２７０１５２